

The Middle Temple Murder
1919
by J.S.Fletcher

目次

ミドル・テンプルの殺人

5

訳者あとがき 301

解説 横井 司 305

主要登場人物

- フランク・スパルゴ……………『ウォッチマン』紙の副編集長
- ロナルド・ブレトン……………新米の法廷弁護士
- ラスベリー……………スコットランドヤードロンドン警視庁の部長刑事
- セプティマス・エルフィック……………法廷弁護士。ブレトンの後見人
- ニコラス・カードルストーン……………法廷弁護士。エルフィックの友人
- ステイーヴン・エイルモア……………下院議員
- イヴリン・エイルモア……………エイルモア議員の長女。ブレトンの婚約者
- ジェシー・エイルモア……………エイルモア議員の次女
- ジョン・マーベリー……………身元不明の謎の人物
- ベンジャミン・クウォーターペイジ……………マーケット・ミルキャスターの元競売人
- ジョン・メイトランド……………〈マーケット・ミルキャスター銀行〉の元支配人
- ジェーン・ベイリス……………ジョン・メイトランドの義妹
- サビーナ・ガッチ……………ベイリス家の家政婦
- ジェイムズ・カートライト・チェンバレン……………元株式仲買人
- E・P・マイヤースト……………貸金庫会社の社員
- ジェイムズ・クリーダー……………切手商

ミドル・テンプルの殺人

第一章 灰色の紙切れ

スパルゴは、〈ウオッチマン新聞社〉を午前二時に退社するのが常だった。すでに朝刊が印刷に回っている時間だ。担当しているコラムの原稿を提出してしまつと、副編集長に昇進したばかりの彼にすることはなく、本来なら輪転機がガタガタと音をたて始める前に帰宅できるのだが、たいいはいは社内をしばらくぶらぶらして二時頃まで過ごした。ほかでもないこの日、一九一二年六月二十二日の早朝、スパルゴは外信部のハケットと話し込んで、いつもより長く居残っていた。アルバニアのドウレスから送られてきた最新の電報についてハケットが興味深い話を始めたので、つい長々と耳を傾けて議論を交わしていたのだった。結局、無意識のうちに煙草をふかしながら社を出て、夜が明ける直前の外気に触れたときには、二時半をだいぶ過ぎていた。フリート^{ストリート}街の空気は清々しく、甘やかさを感じさせるほどで、高くそびえる静寂に包まれたセントポール大聖堂の周囲が、夜明けを予感させるグレーに微かに染まりかけていた。

スパルゴはラッセル^{スケア}広場の西側にあるブルームズベリーに住んでいる。〈ウオッチマン新聞社〉への朝晩の往復には、毎日同じルート——サウサンプトン・ローからキングズウェイを抜けストランドへ出て、フリート街へと続く道を通っていた。何人か顔見知りもでき、特に警察の面々とは親しく言葉を交わす仲だった。一服しながらゆつくりと帰宅する途中に決まった地点で出会う警官たちと挨拶

を交わすのが習慣となっていたのだ。そしてこの朝、ミドル・テンブル・レーンの近くに差しかけたとき、知り合いの警官ドリスコルが路地の入り口に立って辺りを警備しているのを見かけた。さらに、その向こうに現れた別の警官の姿も目に留まった。片手を上げて彼に合図したドリスコルが、振り向きざまにスパルゴに気づいた。一、二歩近づいてきたその顔を見て、スパルゴは何か起きたことを察した。

「何があったんです？」と、スパルゴは尋ねた。

ドリスコルは路地の先の、少し開いた門を自分の肩越しに親指でさし示した。門の向こう側で急ぎベストと上着を着込んでいる男が見える。

「あいつの話じゃ」と、ドリスコルは答えた。「ほら、あそこにいる男——門番なんだが——路地沿いの家の入り口に男が倒れていて、どうやら死んでるようだって言うんだ。しかも、殺されていると思う、つてな」

反射的にスパルゴは、「殺されている」という言葉を繰り返した。

「しかし、なぜ彼はそう思うんでしょう」好奇心に駆られ、ドリスコルのがつしりとした体越しに覗き込みながら訊いた。「根拠は？」

「血痕があるらしいんだ」と、ドリスコルが答えた。こちらへ近づいてくる巡査をちらっと振り返り、再びスパルゴに目を向けた。「あんた、新聞記者だったよな」

「ええ、そうです」

「だったら一緒に来るといい」ドリスコルはニヤッと笑った。「特ダネが拾えるかもしれないぞ。とりあえず記事のネタにはなるだろう」それには応えず、この奥にどんな秘密が隠されているのだろう

と思ひながら路地を見つめていると、もう一人の警官が近づいてきた。それと同時に、着替えを済ませた門番も出てきた。

「こつちです！」と、門番がぶっきらぼうに言った。「ご案内します」

ドリスコルは、新たにやって来た警官と一言二言交わすと門番に尋ねた。

「発見した経緯は？」

門番は、たつた今、一同があとにした門のほうを向いた。

「あの門が閉まる音を聞いたんですよ」いかにも不愉快だったと言わんばかりに、苛立たしげな声で答えた。「確かに聞いたんだ！ だから、わざわざ起きて見に行つたんです。そしたら……なんと、あれを見つけました！」

門番は片手を上げて路地の奥を指した。三人の男たちは門番が伸ばした指の先に顔を向けた。すると、左手の入り口から突き出た、グレーのソックスに靴を履いた男の片足がスパルゴの目に飛び込んできた。

「あのとおり、あそこに突き出てたんです。触っちゃいませんよ。ただ——」

一瞬言葉のみ込んで、不快なものを思い出したように顔をしかめた。ドリスコルが、わかっているというふうに頷いてみせた。「ただ、見に行つたんだよな。そりゃあそくだ。誰の足なのか、普通は確かめに行くよな」

「ええ、そうですとも。とにかく確かめに行つたんです」門番は相づちを打った。「そうしたら血溜まりが見えるじゃありませんか。だから……その、あなた方に知らせに行つたというわけですよ」

「賢明な判断だ」と、ドリスコルは言った。「さてと——」

一行は、入り口の前で足を止めた。冷たく重苦しい雰囲気が漂うその場所は、死者が眠るのにふさわしいとはとても言えなかつた。壁は白いタイル張りで、床はコンクリートだ。どんよりとした朝の空気のもとで見る建物は、スパルゴの脳裏に遺体安置所を思い起こさせた。しかも、階段の上に足を投げ出している男性は、間違いなく死んでいるのだ。微動だにしない体が、それを物語っていた。

少しのあいだ、四人は無言で佇んでいた。二人の警官は無意識に両手の親指をベルトに挟んで指をもぞもぞと動かし、門番は思案顔で顎をこすっていた——のちにスパルゴは、このときの髭をこする耳障りな音を思い出すことになる。スパルゴ自身はポケットに両手を突っ込み、小銭と鍵をチャリンチャリンと鳴らし始めた。四人とも目の前に倒れている遺体を見つめながら、それぞれの思いにとらわれていた。

「見てのとおり」押し殺した声で、唐突にドリスコルが私見を述べた。「明らかに遺体は不自然に横たわっている。まるで、そこに置かれたかのようにな。壁に立てかけられていて滑り落ちたって感じだ」

スパルゴは記者らしい視点で細かな所まで観察していた。足元にある初老の男の遺体に目をやる。顔は壁に押しつけられていて見えないが、白髪と白い頬髭から初老だと判断した。仕立てのよいグレイのチェックの服——ツイードだ——に身を包み、上等な靴を履いている。力なく垂れ下がった袖口から覗くりネンのシャツも高級品だった。片脚は体の下で折れ曲がり、もう一方は戸口をふさぐように伸びきって、胴体はねじれて壁にもたれかかっていた。ぐしゃりと肩が押しつけられた白いタイルの壁には血痕がついている。ドリスコルがベルトから片手を離して血痕を指さした。

「どうやら」と、おもむろに口を開く。「ここから出てきたところを背後から殴られたようだな。そ

の鼻血は、倒れたときに出たんだ。どう思う、ジム」

もう一人の警官が咳払いをした。「警部を呼んだほうがいいだろう。それから、医者と救急車もな。死んでるんだよな」

ドリスコルは屈んで、歩道に伸びた手に触れた。

「そのようだ」と、短く答える。「硬直もしている。急いで連絡だ、ジム！」

スパルゴは、警部が到着し、救急搬送用のストレッツチャーが来るまで待った。警官の数はさらに増えていった。遺体安置所へ運ぶために動かされたとき、死んだ男の顔が見えた。ストレッツチャーに載せた遺体の手足の位置を警官が整えているあいだ、スパルゴはずっと、目の前のこの男は誰なのか、どうしてこのような最期を遂げることになったのか、殺人者の目的は何かなど、さまざまな思いを巡らせていた。職業上の好奇心もあったが、同じ人間がこんなにもあっさり殴り殺され、この世から消されてしまったことに対する嫌悪感を禁じ得なかったのである。

死んだ男の顔に際立った特徴はなかった。見たところ、年齢は六十から六十五といったところだ。平凡で家庭的な感じさえする顔立ちで、流行遅れのスタイルを踏襲した、耳と顎先の間で切り揃えられた白い頬髭以外は、きれいに剃られている。唯一の特徴と言えるのは、やけに皺しわが多いことだった。口の端や目元にある皺は、数が多いうえに深い。険しい人生を送り、精神的にも肉体的にも激しい嵐の風雨にさらされてきたのかもしれない。

ドリスコルはスパルゴを肘で軽く小突いてウイंकをしてみせた。「安置所までついできたほうがいいぞ」と耳打ちする。

「どうしてですか」

「遺体をくまなく調べるからな。所持品もすべてチェックするんだ。そうしたら、この男の素性やなんかがわかるかもしれない。記事を書くのに役立つんじゃないか？」

スパルゴは躊躇ちゆうちゆうした。夜中までハードな仕事をこなしていた彼は、ドリスコルに出くわすまで、自宅でゆったりと温かい食事を済ませてからベッドにもぐり込むのを楽しみにしていたのだった。電話一本で会社から遺体安置所に誰かを派遣してもらえばいい話だ。こういうことは、もうスパルゴの専門ではない。今の彼の立場は――。

「この件にまつわる謎から、何か大きなネタがつかめるかもしれないじゃないか」と、ドリスコルがそそのかした。「こういう事件には、何が潜ひそんでるかわからんぞ。予想もつかないことが隠かくれていたりしてな」

その一言がスパルゴに決断させた。なにより、これまでに培つちかってきた特ダネをつかむ習性がうずき始めてもいた。

「わかりました。お供しましょう」

煙草にまた火をつけ、まだ人けのない静かな街の中を小さな行列のあとについて歩きながら、殺人という行為が人目につくことなくひっそりと行われたことについて考えていた。他殺であることが九分九厘間違いない被害者がここにおいて、ロンドンの幹線道路を、そうした事件を扱うのを日課としてある警察官らの手によって音もなく運ばれている。黙々と、着実に――。

「私の考えじゃ」スパルゴの傍らで声が出た。「あの人は別の場所で殺されたんだ。あそこじゃない。あそこは遺体が置かれただけだ。きつとそうですよ」スパルゴが顔を向けると、門番がすぐ横にいた。彼も遺体に付き添ってきたのだった。

「ほう！　すると、あなたは——」

「どこか別の場所で殴り殺されてあそこに運ばれたんだと思いますね。たぶん、どこか人目につかない部屋でしょう。ロンドンも、あちこちにおかしな連中がいますからね。まったく困ったもんだ！　殺された人は、ゆうべ、私の門番小屋の前からは入ってこなかった——その点は断言できる。それに、あの人はいったい誰なんでしょうね。見たところあそこの住人じゃなさそうだ」

「それを今から聞きに行くんです」と、スパルゴは言った。「警察が彼の素性を突き止めますよ」

しかし、まもなくスパルゴは、警察が何も突き止められなかったことを知らされた。警察医によれば、死んだ男は背後から強烈な一撃を食らって頭蓋骨を骨折し、ほぼ即死だったという。ドリスコルの見立ては金品目的の強盗犯の線だった。遺体の着衣に何も残されていなかったからだ。きちんとした身なりをした男性なら、懐中時計やチェーンを所持し、ポケットに現金を入れているだろうし、指輪をはめていたっておかしくはない。ところが、金目のものは何も発見されなかった。それどころか、身元につながるものが一切ない——手紙も、書類も、何一つないのである。どうやら、犯人は被害者を殴打したあと、所持品をすべて奪っていったようだ。唯一、身元特定の手がかりになりそうなものといえば、ウエストエンドの高級店で買ったと思われる、グレーの布製のソフト帽だった。

これ以上粘っても何も出そうになかったので、スパルゴは自宅に帰った。空腹を満たしてベッドにもぐり込んだが、どうにも寝つけない。恐怖におののくタイプではないが、やはり早朝の一件のせいで神経が休まらないのだと観念した。仕方なく起き上がり、冷たいシャワーを浴びてコーヒを飲み、家を出た。ブルームズベリーをあとに歩き始めたときには特に当てもなかったのだが、三十分後、自然と足は身元不明の遺体が眠る安置所の近くにある警察署に向かっていた。すると、勤務を終えて出

てきたドリスコルと出くわした。ドリスコルはスパルゴを見てにやりとした。

「ツイてるな。ほんの五分前に、哀れな男のベストのポケットに押し込まれていた、灰色のメモ用紙が見つかつたところだ。裂け目に入り込んでいたらしい。中に入れて見せてもらうといい」

スパルゴは警部のオフィスへ向かつた。そして一分後、その紙切れに目を凝らしていた。そこには、鉛筆で殴り書きした住所が書かれていた。ロンドン市テンプル、キングス・ベンチ・ウォーク。法廷弁護士ロナルド・ブレトーン――。